今昔画圖續百鬼
晦
中

今昔續百鬼巻之中

不知火
筑紫の海に
もゆる火ありて
景行天皇の
御船を迎しとかや
されば歌にも
しらぬひの
つくしとつゞけたり

古戦場火
一将功なりて万骨かれし枯野にハ
燐火とて火のもゆる事
あり是ハ血のこぼれ
る地より
かえん出る火なりといへり

青鷺火（あをさぎのひ）

青鷺（あをさぎ）の年を経（へ）しハ夜（よる）飛（とぶ）ときハかならず其羽（そのは）ひかるものなり目の光に映（えい）じ嘴（くちばし）とがりてすさまじきよし

提燈火

田舎みちなどに提灯火とて畔径に火のもゆる事あり名ずし按よ狐の嫁の下部のもてる提灯にや

墓の火

去るものハ日ゝにうとく
生ずるものハ日ゝにしたし
ふるきつかハ
犂かれて田となり
しるしの松ハ薪となり
されど五輪のかたちあり〱と
陰火のもゆるハあまりに
いかなる執着の
ふかゝらんかし

火消婆
それ火ハ陽気なり妖ハ陰気なりうば玉の夜のくらきハ
陰気の陽気にかつ時なれバ火消ばゞも
あるべきにや

油赤子(あぶらあかご)

近江国(あふみのくに)大津の八町に玉のごとくの火飛行(ひぎやう)する事あり 土人云むかし志賀の里に油うるものありて夜毎(よごと)に大津辻(つじ)の地蔵の油をぬすみけるが その者死(し)て魂魄(こんぱく)炎(ほのほ)となりて今に迷(まよ)ひの火となれるとぞ しからバ油をなむる赤子ハ此ものゝ再生(さいせい)せしにや

片輪車（かたわぐるま）

むかし近江（あふみ）の国甲賀（かうか）郡（ごほり）によな〳〵
ある人戸のすきまよりさしの
ねやにありし小児（せうに）いづくへ
せんかたなくそうくちん

つみとがはわれにこそあれ
小車のやるかたわかぬ
子をばかくしそ

その夜（よ）女のこゝろあさく
やさしの人かなさらば
子をかへしけるとて
すゞへける
そのゝちは
人おそれて
あへてこざりし
とかや

大路（おほぢ）を車（くるま）のきしる音（おと）しける
できたるうちは
きしかえれば

輪入道

車の轂に大なる入道の首つきたるが
かた輪あくをのれとめぐりありくありこれをみる者魂を失ふ
此所勝母の里と紙にかきて家の出入の
戸におせばあへてちかづく事なしとぞ

陰摩羅鬼
藏經の中に初て新なる屍の氣
變じて陰摩羅鬼となると云り
そのかたち鶴の如くして色
くろく目の光ともしびの
ごとく羽をふるひ
て鳴声たかし
と清尊録
にあり

皿かぞへ

ある家の下女
十の皿を一ツ
井におとし
ける科によりて害せられその亡魂よな〳〵井のもとにあらはれて皿を
一より九までかぞへて十をいはずして泣叫ぶといふ此古井ハ播州にありとぞ

人魂
骨肉ハ土に帰し
招魂の法を修すべし

舟幽霊(ふなゆうれい)

西国(さいこく)またハ九国なとも海上(かいじやう)の風はげしく浪(なみ)あらきときハ波のよる人のかたちのものおほくあらはれ底(そこ)なき柄杓(ひしやく)なくて水を汲(くむ)あり これを舟幽霊(ふなゆうれい)とよふこれハとらへる舟の楫(かぢ)をとられてゆくえもしらぬ魂魄(こんはく)の[illegible]りしするへし

川赤子
山川のかはせのうちに赤子の
かたちしたるものありこれを
川赤子といふなるよし
川たらう川童の
類ならんか

古山茶の霊
ある山茶の精怪しき形と
化して人をたぶらかす事ありとぞ
すべて古木ハ妖をなすもの
多し

加牟波理入道

大晦日の夜厠にゆきてがんばり入道郭公と唱ふれば妖怪をみざるよし世俗のしる所なりもろこしには厠神の名を郭登といへりこれ遊天飛騎大殺将軍とて人に禍福をあたふと云郭登郭公同日の談なるべし

雨降小僧

雨のかみを雨師といふ雨ふり

小僧といへるものハめしつかふる侍童にや

日和坊

常州の深山にあるよし雨天の節ハ見えねども日和なれバ形あらはるゝと云
今婦人女子てるてる法師といふものを紙にてつくりて晴をいのるハこの霊を祭れるにや

青女房

荒たる古御所には青女房とて女官のかたちせし妖怪ぼうぼう眉に鉄漿くろぐろとつけて立まふ人をうかゞふとかや

毛倡妓
ある風流士いづれ女のもとよ
ゆかんと八ツ時ぶ青楼のれんじの
あたりく女の髪うちこぼしたる
うしろ姿をよくその人かとゑをとれ
ば額も廣
一すぢん
に髪おひのく
目もあてらるさまよ
こころまどひうろ
ねぶるきく
さりえ
いとうるさきん

骨女

これハ御伽ぼうこに見えたる年ふる女の髑髏牡丹の燈籠を携へ人間の交をなせし形なりもとハ剪燈新話のうちに牡丹燈記とてあり